30　 和歌に詠まれた人々のおもい　　　 文法　和歌の修辞

読解　和歌の主題をつかむ

Ａ　あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の　ながながし夜を　ひとりかも寝む　　（）

Ｂ　みかの原　わきて流るる　いづみ川　いつ見きとてか　恋しかるらむ　　　　（）

Ｃ　山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人目も草も　かれぬと思へば　　　　　（）

Ｄ　花の色は　うつりにけりな　㋐いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに（）

Ｅ　契りきな　㋑かたみにを　しぼりつつ　末の松山　波越さじとは　　　　　（）

Ｆ　滝の音は　絶えて久しく　なりぬれど　名こそ流れて　なほ聞こえけれ　　　（）

修辞

れ＝一首の和歌が、意味のうえで何句目かでいったん切れること。

＝同音を利用して一つの言葉に二つ以上の意味をもたせる（掛ける）和歌の表現技法。

＝和歌のうえで、一定の言葉の前（枕）に習慣的におく通常五音の修飾語。普通は現代語訳しない。

＝和歌のうえで、中心となる語句の部分へつなぐ前置き（序）となる部分。二句以上にわたることもある。

＝歌の中心的な主題をより強調するため、ある一つの語と縁の深い言葉を使って、歌にあや（味わいや深み）をつける表現。

【原文】

　あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の　ながながし夜を　ひとりかも寝む（柿本人麻呂）

　みかの原　わきて流るる　いづみ川　いつ見きとてか　恋しかるらむ　　　　（中納言兼輔）

　山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人目も草も　かれぬと思へば　　　　　（源宗于朝臣）

　花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに　（小野小町）

　契りきな　かたみに袖を　しぼりつつ　末の松山　波越さじとは　　　　　　（清原元輔）

　滝の音は　絶えて久しく　なりぬれど　名こそ流れて　なほ聞こえけれ　　　（大納言公任）

問一　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（㋐は終止形でよい）。〈2点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕

㋑〔　　　　　　　　　　〕

問二　和歌Ａから枕詞を抜き出せ。〈2点〉

〔　　　　　　　　　　〕

問三　和歌Ａ・Ｂの序詞に、傍線を引け。〈2点×2〉

問四　和歌Ｃの傍線部は何と何との掛詞になっているか。漢字を用いて答えよ。〈2点×2〉

〔　　　　　　〕と〔　　　　　　〕

問五　和歌Ｄの傍線部を、掛詞に留意して二通りに現代語訳せよ。〈3点×2〉

・〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

・〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　［チェック問題］和歌の修辞

(1)　次の枕詞が導く語を、後から選べ。〈1点×5〉

1　くさまくら　　2　しろたへの　　3　たらちねの

4　ちはやぶる　　5　ひさかたの

　ア　旅　　イ　光　　ウ　母　　エ　神　　オ　衣

1〔　　　〕　2〔　　　〕　3〔　　　〕　4〔　　　〕　5〔　　　〕

(2)　傍線部は何と何との掛詞になっているか。漢字を用いて答えよ。〈2点

×2〉

1　あき果てぬれば訪ふ人もなし（続古今集）

2　秋の野に人まつ虫の声すなり（古今集）

1〔　　　　〕と〔　　　　〕

2〔　　　　〕と〔　　　　〕

問七　和歌Ｅについて、

(1)　何句切れか、答えよ。〈2点〉

〔　　　　　　　〕

(2)　この和歌は、次の和歌を本歌とした「本歌取り」の技法で詠まれている。これを参考にして、傍線部の表現に含まれる内容として、最も適当なものを選べ。〈3点〉

《本歌》君をおきて　あだし心を　我が持たば　末の松山　波も越えなむ

ア　浮気は絶対に許さない。　　　イ　浮気などした覚えはない。

ウ　もう二度と浮気はしない。　　エ　浮気することは決してない。

〔　　　〕

問八　和歌Ｆの傍線部「滝」と「音」について、縁語を抜き出せ。〈2点×2〉

「滝」＝〔　　　　〕

「音」＝〔　　　　〕

問九　Ａ～Ｆの和歌の主題として最も適当なものを選べ。〈2点×6〉

ア　心変わりへの恨み　　イ　もの寂しい風情　　ウ　衰えへの哀感

エ　恋の始まり　　　　　オ　懐旧の情　　　　　カ　独り寝の嘆き

A〔　　　〕　B〔　　　〕　C〔　　　〕

D〔　　　〕　E〔　　　〕　F〔　　　〕

【解答】

問一　㋐＝むなしい　㋑＝たがいに〈2点×2〉

問二　あしびきの〈2点〉

問三　Ａ＝あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の

　　　Ｂ＝みかの原　わきて流るる　いづみ川〈2点×2〉

問四　「枯れ」と「離れ」〈2点×2〉

問五　・長雨が降っていた間に　・もの思いにふけっていた間に〈3点×2〉

問六　(1)　1＝ア　2＝オ　3＝ウ　4＝エ　5＝イ〈1点×5〉

(2)　1＝「秋」と「飽き」　2＝「松」と「待つ」〈2点×2〉

問七　(1)　初句切れ〈2点〉

(2)　エ〈3点〉

問八　「滝」＝「流れ」　「音」＝「聞こえ」〈2点×2〉

問九　Ａ＝カ　Ｂ＝エ　Ｃ＝イ　Ｄ＝ウ　Ｅ＝ア　Ｆ＝オ〈2点×6〉

【現代語訳】

Ａ　山鳥の尾の垂れ下がった尾が長いように、秋の長い夜をひとりで寝ることになるのだろうか。

Ｂ　みかの原を二分するように湧き出て流れる泉川ではないが、いったいいつ逢ったというので、こうも恋しいのだろうか。

Ｃ　山里は冬がとくに寂しさがまさるものだよ。人も訪ねてこなくなり、草も枯れてしまうと思うので。

Ｄ　桜の花は色あせてしまったなあ。むなしく春の長雨が降っていた間に。私の容姿もすっかり衰えてしまったなあ。男女のことで時を過ごしむなしくもの思いをしていた間に。

Ｅ　約束したことだったよ。たがいに涙に濡らした袖をしぼってはしぼっては、末の松山を波が越さないように、二人の心が変わらないようにするということを。

Ｆ　滝の水音は聞こえなくなってから長い年月がたってしまったけれども、その名声だけは流れ伝わって、今でもやはり聞こえてくることだ。

【補充問題】

問１　Ａの和歌の序詞は、どのようなことを強調しているのか。最も適当なものを選べ。

ア　夜には自分一人で寝る可能性が高いということ。

イ　夜を長く感じているのは自分だけだということ。

ウ　自分一人で寝る夜が長く感じているということ。

エ　一人で寝ているのは自分だけではないということ。

問２　Ａの和歌の「ひとりかも寝む」の解釈として、最も適当なものを選べ。

ア　自分一人で寂しく寝ることになるのだろうか

イ　長い夜を自分一人でさびしく寝たくないものだ

ウ　自分一人だけが寂しく寝ているのだろうか

エ　長い夜を一人寂しく寝られないのになあ

問３　Ｅの和歌の「かたみに袖をしぼりつつ」の解釈として、最も適当なものを選べ。

ア　何度も涙で濡れた自分の袖をしぼって

イ　涙に濡れた相手の袖をしぼり続けて

ウ　涙で濡らした袖をしっかりしぼりながら

エ　互いに涙に濡らした袖をしぼっては

【補充問題解答】

問１　ウ

問２　ア

問３　エ